『クラリッサ・ハーロウ』の周辺

岡　照　雄

はしがき

リチャードソン（Samuel Richardson）の小説はピューリタンの日常教訓書（conduct books）から出発し、次第にフィクションの要素を加えながら、イギリス近代小説の確立に寄与した。彼の作品の成立過程はきわめて慎重で、教訓主義の枠から一歩ふみ出してはまた後退するような憶病さがある。この態度は『クラリッサ・ハーロウ』（*Clarissa Harlowe*）―以下『クラリッサ』と略す―の場合に特によくうかがうことができると思う。この事情の一端について私はさきに発表したこともあるが、以下の小論では、『クラリッサ』の成立を調べ、初期イギリス小説をめぐる事情をさぐり、この作品全体の解釈のための手がかりを得たいと思う。より完全なリチャードソンの書簡集がやがて刊行される予定で、これを参照することができないのは残念であるが、今は限られた立場から考えてゆくことにする。

『パミラ』（*Pamela*）と『クラリッサ』

彼の最初の小説と一般に云われている『パミラ』は、熱狂的な歓迎をうけたが、同時に酷評もうけ、激烈な諷刺の的ともなった。できるかぎり高い値で貞操をうりつけ、遂に地主の正妻の地位を得た小間使いのパミラ、というのが、フィールディング（Henry Fielding）によるパロディ『シャミラ』（*Shamela*）の主張であるが、このパミラの打算的な行動や「徳の報い」という露骨な功利主義が、多くの人達の反感を買うことになる。このようなモラルを若い娘の鑑として読者に押しつけようとする作者の態度は不愉快ではあるけれども、日常の実践道徳として見るならば、ここに盛られた教訓は当時の市民階級の間でほぼ承認されていたと考えてもよいであろう。リチャードソンの性格にパミラのそれに似た点があったことは事実としても、彼が徒弟から出発して遂に政府刊行物の印刷を引受け、上流社会の人々と交際するまで成功したこと自体、やはり素直に徳の報いとして認めねばならない。その彼が全く偶然のことから『パミラ』執筆を思いついたがために、このような批難をうけることになったのである。それに、『パミラ』を私達はあまり文学的に読みすぎるのではないだろうか。もちろん小説的な道具立てのいくつかは揃っている。しかし作者としては日常教訓書にいくらかのフィクションを交えて色彩をそえたつもりであったとも考えられる。ドブレ（Bonamy Dobrée）は、デフォー（Daniel Defoe）のある種の作品を novelistic writings として取扱っているが、[1] これは『パミラ』や『クラリッサ・ハーロウ』も含めて初期小説を読む時忘れてはならぬことである。さて作者は『パミラ』の成功に力を得ていっそう大胆な実験にのり出すのであるが、その反面、反パミラ批評にこりてひどく慎重にもなっている。次の作品『クラリッサ・ハーロウ』にはこれらの矛盾した態度が見られる。

『クラリッサ』のテーマを教訓書風に表現すれば、初版、二版のタイトルページにあるように "Particularly Showing the Distresses that May Attend the Misconduct Both of Parents and Children, in Relation to

Marriage.”ということになる。この種の教訓書の主要なテーマの一つである結婚問題における親の権威と娘の自由が、『クラリッサ』においても取り上げられていることがわかる。この点では『パミラ』と似ている。豊かな地主の次女で美しく徳高いクラリッサに、貴族の縁故のラヴレイス（Lovelace）という青年が目をつける。彼は才気に溢れ、教養もあるが身持のよくない男である。彼女が祖父の財産を譲られることになっていること、はじめクラリッサの姉に目をつけたラヴレイスが、途中からクラリッサの方に関心を持つようになったこと、などから、兄や姉、それに父も彼女に冷たく当るようになり、彼女がどうしても好きになれぬ男を押しつけようとする。窮地に立った彼女は、止むを得ず、また、なかばだまされてラヴレイスを頼って家出する。いつの間にか彼女はこの男にかすかな好意を感じていたのである。そして彼女はロンドンのいかがわしい家に押しこまれ、薬をのまされてラヴレイスに貞操をうばわれる。肉身に見捨てられた彼女は、こうなった以上ラヴレイスと結婚するのがもっともよい解決法だとする知人のすすめをきっぱり断り、ラヴレイスの手を拒否し、病のため死ぬ。ラヴレイスも彼女の従兄との決闘で落命する。教訓書のテーマを用いた点では、先に述べたように『パミラ』と同様であるが、親と娘の「あやまった行動」（misconduct）を通してそのテーマを表現したことは、露骨に真正面から教訓的意図を押しつける『パミラ』からみれば大きな進歩である。『パミラ』との決定的な相違は、『クラリッサ』で、結婚問題についての型通りのルールをクラリッサの置かれた家庭的環境、彼女のセンシビリティ、恋愛感情という特定のケースに適用し、そのルールのあり方を検証したことにある。マッキロップ（A. D. McKillop）は、「冷たい一般原則と個人のケースとの対立」を描くことにより、彼の物語は「道徳的あいまいさの世界」（a world of moral ambiguities）の中に入っていった、と云う。[2] リチャードソンはここで一時的にもせよ教訓書から小説へ一歩ふみこんだのである。しかし、作者の教訓的意図は依然としてはっきりしている。教訓作家と

してはあいまいさを許すことはできない。その上に『パミラ』が受けた（彼としては）不当な評価、誤解を修正しようという考えが常に彼の心を占めている。それが『クラリッサ』の創作に当って微妙なはたらきをする。この一面が「悲劇的結末」（Tragic ending）をめぐる意見にあらわれている。

悲劇的結末

リチャードソンの周囲には何人かの社交界の人達、特に女性がいる。彼等は作品のストーリー、性格の描き方に深い関心を持っていた。彼の方でも彼等の意見を気にして、しばしば批評を求めた。彼の作品の序文やあとがきは、彼等とのやりとりの中から生れた部分も多いのである。さて、悲劇的結末というトピックは、主としてベルフォア夫人（Mrs. Belfour）、実はレディ・ブラッヅヘイ（Lady Bradshaigh）との間の手紙に扱われている。その内容は要するにクラリッサが改心したラヴレイスと結婚し、万事うまく解決するという、あとがきの表現によれば「大へん安易で、陳腐な便法」をベルフォア夫人が示唆したのに対し、リチャードソンは烈しく反対した、ということになる。これには次のような事情がある。作者は、ラヴレイスを傷つけられたプライドと復讐心やゆがんだ愛情から、クラリッサを誘惑しようと様々の策略をめぐらす社交界の放蕩者（rake）として描こうとしていた。レストレイション時代の演劇によく現われるタイプである。ところが、美男で婦人にいんぎんであるし、上流社会のマナーをそなえ、声美しくダンスに巧みな人物ということになっている彼は、リチャードソンの周囲の女性読者間では意外に好評で、好ましい青年紳士として歓迎されるという結果になった。これは教訓的目的からいって作者には困ったことになる。進退きわまったクラリッサが援助を求める男、不道徳な男と知りつついつか好意を持つようになった男――そうでなければクラリッサのような徳高い女性が彼に助けを求める筈がない

――という物語の要請からしても、ラヴレイスはかなりの魅力をそなえた人物として描かれねばならなかったのである。この点はベルフォア夫人への手紙の一つにおいて説明されている。[3] クラリッサのためを思ってラヴレイスに幾分よい点を与えるようにしたのだが、それが御婦人方をこれほど引きつけようとはその時すこしも思わなかった。ある若い女性に見せたら、この人はラヴレイスにすっかり同情してしまい、所によっては同情の涙さえこぼすのでおどろいた、とリチャードソンは告白する。先に引用したタイトルページにもあるように、かりそめにもこの男に好意を感じ、親にそむいて家出をしたのはクラリッサの misconduct である。この点ははっきりさせておかねばならない。悪人ラヴレイスにこれ程の人気が集中することは作者には意外であると同時に、腹立たしいことでもあった。美徳の模範として描いた筈のパミラが、ずるいあばずれ女だ、と批評されたのに似て、いささか事情は違うが、一応悪人のつもりで書いたラヴイレスがかえって人気を得る、という皮肉な結果が生じたことになる。

これについては、ラヴレイスという性格のモデル問題を考え合わせるともっとはっきりするようである。ラヴレイスが作中でドライデン (Johh Dryden)、ロウ (Nicholas Rowe)、オットウェイ (Thomas Otway) などの作品からのせりふを度々口にすることからも想像できるように、作者自身もラヴレイスの性格を描く時、レストレイション時代のドラマにヒントを得ていた。これはすでにマッキロップなどが指摘している。『パミラ』での教訓書の枠を出ない書き方に比し、『クラリッサ』の場合作者がいっそう文学的な作品に接近していたことがこれによってもわかる。ところで、そのうち特に注目すべきは、ロウの作『フェア・ペニテント』(*The Fair Penitent*, 1703) 中の人物ロサリオ (Lothario) である。ロウの作品への言及は『クラリッサ』に多く見られ、またラヴレイスの手下で、のち後悔してクラリッサの世話をするベルフォード (Belford) が、その手紙の中で『フ

ェア・ペニテント』をかなりくわしく論じている。[4] ここで彼は女主人公カリスタ（Calista）とクラリッサの性格を比較し、後者こそ fair penitent の名にふさわしい女性である、と云っている。このカリスタが“the too faithless, yet too lovely Lothario”と云うロサリオとラヴレイスとの関係もかなり古くから云われている。たとえばジョンソン博士は『詩人伝』中のロウの部で次のように書いている。

> The character of Lothario seems to have been expanded by Richardson into Lovelace; but he has excelled his original in the moral effect of the fiction. Lothario, with gaiety which cannot be hated, and bravery which cannot be despised, retains too much of the spectator's kindness. It was in the power of Richardson alone to teach us at once esteem and detestation, to make virtuous resentment overpower all the benevolence which wit, elegance, and courage naturally excite; and to lose at last the hero in the villain.[5]

この言葉の後半が実現されていたら、リチャードソンの教訓目的は達成されたであろうが、事実は、リチャードソンの周囲の婦人達の多くに関する限り、先に触れたようにジョンソン博士の意見とは反対であった。ジョンソン博士と同時代の批評家には、『クラリッサ』の教訓目的がラヴレイスの性格のためあいまいになっている、とするものもあったのである。次にそれを二つ引用してみる。

> His high spirit, brilliant qualities, and fine person are so described as to put us in danger of false impressions in his favor and to set the passions in opposition to the moral of the piece.[6]

But, on the other hand, when a character like Richardson's Lovelace, whom the reader ought to abominate for his crimes, is adorned with youth, beauty, eloquence, wit, and every other intellectual and bodily accomplishment, it is to be feared that thoughtless young men may be tempted to imitate, even while they disapprove, him.[7]

これらの意見は『クラリッサ』の出版から三十年以上あとに発表されたものであるが、出版前後のリチャードソンがしきりに心配していたことをそのまま述べているように思われるのである。教訓と小説の素朴な対立がここに見られる。ウォード（H. G. Ward）は一九一二年これらの両人物の共通点をいくつか指摘してこのモデル説を肯定し、[8]標準的伝記の著者マッキロップもこれを認めているようである。ウォードの云う共通点とは、両人物とも復讐心に支配されて行動する、結婚の束縛を嫌い（marriage-hater）、反省心なく、家系を誇る、等である。しかし、これまで述べたように、「魅力的な放蕩者」として描かれていることも忘れてはならない。ラヴレイスは、ロサリオと同様に、作品の教訓的目的をあいまいにするおそれがあったのである。

読者達がラヴレイスについてこういう印象を持っているのに、彼も penitent としてクラリッサと結婚する、という結末にしては、文学的効果はもちろん、教訓的意図も達成できない。しかも『パミラ』での苦い経験をくりかえすことはどうしても避けねばならない。リチャードソンは一七四八年十月、ベルフォア夫人への手紙でクラリッサの死という結末を弁護する。この内容は『クラリッサ』の序文、あとがきに反映されている。ここで彼は云う。ラヴレイスに好意的な読者があるのにおどろき、かつ心配している。それを思うと、どうしてもこの作品は悲劇に終るようにしなくてはならぬ、と。もしクラリッサがラヴレイスと結婚して終ることになれば『パミラ』のくりかえしではないだろうか。世間には沢山いるラヴレイスのような男たちはこう思うだろう。若いうち

に娘共をだましてたのしみ、遂にはクラリッサのような立派な女性と知り合ったら、あらゆる手を用いて彼女を誘惑しよう。そして、

I may fit up all my batteries against her virtue; and if I find her proof against all my machinations, and myself tired with rambling, I may then reward that virtue: I may graciously extend my hand—she may give me hers, and rejoice, and thank heaven for my condescension in her favour. The Almighty, I may suppose, at the same time, to be as ready with his mercy, foregoing his justice on my past crimes, as if my nuptials with this meritorious fair one were to atone for the numerous distresses and ruins I have occasioned in other families: and all the good-natured, the worthy, the humane part of the world, forgiving me too, because I am a handsome and humorous fellow, will clap their hands with joy ...[9]

こうなれば、あの "a reformed rake makes the best husband" という俗説を承認することになってしまう。私の意図はこの馬鹿げた考えをやっつけることなのです、とリチャードソンは力説する。こう云うリチャードソンは明らかに『パミラ』を意識している。ここで彼は『クラリッサ』の結末を弁明すると共に、『パミラ』についての誤解を一掃しようと試みているのである。少くとも『パミラ』第一部の終りでは、「改心したレイク」のB氏は立派な夫になりそうで、『パミラ』はこの俗説の例証とさえ見える。この印象は何とかして修正しなければならないのである。ロンドンに連れ出され貞操をうばわれた時、こうなっては、ラヴレイスの求めるままに結婚するのが結局は最善の道である、とすすめる友人ミス・ハウ (Miss Howe) などの忠告を受け入れず、このような「生活上の便宜」(conveniences of life) に従うことなく死をねがうクラリッサの描写は、時に胸をうつも

のがあるが、その背後にはリチャードソンのもっと現実的な必要もあったのである。こうして、どの点から見ても、ハッピイ・エンディングの要求をみとめるわけにはゆかない。

話題の人物ラヴレイスは、私達にもかなり魅力のある性格に見える。ハーロウ一家への復讐と、天使のようなクラリッサを地上にひきずりおろし屈服させることに無上のよろこびを感じている彼は、リチャードソンがクラリッサを通して説く様々の美徳の重苦しさと対照的に、その悪魔的性格の故にかえって私達にうったえるものを持っている。また、土地財産をふやし、あわよくば貴族に成り上ろうという野心しかないハーロウ一家へのラヴレイスの態度は時に痛快でもある。その上に、この人物の言葉や行動によってリチャードソン自身も上層市民階級の一面、更にはクラリッサ自身をも批判しているように見えることさえある。[10] こんな所にも書簡体小説の面白さがある。登場人物の気持と一体になって手紙を書くというコンヴェンションがここで役立っている。そればかりでなく、作者はラヴレイスの手紙を書いてゆくうちに、無意識的にこの人物を通じて自分の抑圧された様々の性的ファンタジーを解放していたと感じられるところさえある。ワット（I. Watt）、ゴルデン（M. Golden）など最近の注目すべき研究はこの視点を採用している。[11] クラリッサを欺くため、二重、三重のわなをしかけ、これにかかって苦しみもだえる彼女を様々に心に描くラヴレイスのしつような想像力は、単なる悪役のそれではなく、作者自身の圧えられた情熱を感じさせる。リチャードソンはこういう性的衝動につよくひかれながら、あるおそれ、警戒心をもってそれを眺めている。パミラが寝室で若主人が入ってくるかもしれないとおそれながら、ある期待を持つあの心理に似たものが作者にもあるらしい。パミラのこういうところをとらえてフィールディングの『シャミラ』は諷刺の題材とした。こうして、リチャードソンとラヴレイスとの間には、ミルトンとセイタンとの間にある共感に似たものがあるらしい。ラヴレイスは自分のことを“the devil in Milton”という。婦人読

者の意見へのリチャードソンの「おどろきと心配」には、こういうひそかな共感を指摘された者のろうばいも含まれているに違いない。そして二版以後、ラヴレイスの性格をはっきり悪役とするために、作者は様々の改訂、増補をすることになるが、この点をもうすこし明らかにするため、次の論点へと移ることにしたい。

The Doctrine of Moderate Rakery

悲劇的結末についてのやりとりから約二年後、ベルフォア夫人と名乗った女性は、レディ・ブラッヅヘイという本名をあきらかにしていた。この頃リチャードソンは第三の作品『サー・チャールズ・グランディソン』(*Sir Charles Grandison*) の執筆にかかっていたが、この中で扱われる筈の理想的男性に関連して、ブラッヅヘイは一七五〇年十一月、リチャードソンに“moderate rake”とでもいうべき理想的男性は考えられないでしょうか、という話題を持ち出した。あまり固苦しくて真面目な善人ではなく、ある程度世間を知り、教養もあり、あそびも適度にする。rake ではあっても abandoned profligate ではない。これを彼女は moderate rake と呼ぶのであるが、こんな人物は考えられませんか、とリチャードソンに提案する。これは明らかに二年まえのラヴレイスについての対立のつづきである。この手紙の口調からみても、彼女は世間を知らぬ固苦しい道徳家リチャードソンをヤユしている。そして、時には酒を飲みすぎることはあっても、sot とまではゆかぬ人があるが、私のいうタイプはそんな人です、と彼女はこういう説明もする。ところが貴方は世間の悪の面ばかりに目がゆくので、世間を知ることによって得られる良識、マナーがわからないのです、と云って彼の作品中の真面目な人物のタイプを批評する。

The misfortune is, you are by what is called nature, so very prone to vice, that there is hardly such a thing as shewing you the world, without increasing your wickedness; and most of your sober men have seen but little, which is the reason they so often fail in their dress and address. And if these things ought not to be the chief considerations, as they certainly ought not, yet they must have their weight, and youth will have its follies: and, say what you will, there is no shutting the eyes of young people against appearances.⑫

右の言葉は、前節で述べたラヴレイスに対する婦人達の気持をすこし違った立場から説明するのであるが、同時にリチャードソン自身の性格と小説の限界を指摘している。ブラッヅヘイの口調にわからずやのリチャードソンへの皮肉があるなら、他方リチャードソンの返信には、自分の真面目な意図がどうしてわからないのか、といういらだちが感じられる。彼は、もし善良な人物がレイクの dress and address を身につければ、それで婦人達の好意が得られる、とおっしゃるのですが、とやり返す。レイクはあくまでレイクであって、善人が適度にレイクのマナーを身につける、といった器用なことは出来ません、と真っ向から反対するが、ここで再び『クラリッサ』の結末の問題が出てくる。

"To reform Lovelace for Clarissa's sake!"—Excellent ladies!—Unbounded charity!—Dear souls! How I love your six forgiving charmers!—But they acknowledge this, I hope, only among themselves!—If there are any Lovelaces of their acquaintance, I hope they give not to them such an indirect invitation to do their worst, in order to give themselves an opportunity to exercise one of the brightest grace of a Christian.⑬

このいらいらした口調、彼にしては珍らしい烈しさは注目に値する。「御婦人方全部の気に入るような理想的人物を描くわけにはゆきません」と云う時、彼はこの話題についてブラッヅヘイとの間に深いみぞがあることを感じているらしい。それは単なる見解の相違ばかりでなく、階級意識の問題も暗示する。そしてここでリチャードソンのもう一つの面が浮び上ってくるのである。

こうして、彼のいわゆる doctrine of moderate rakery に強く反撥したものの、あとで彼は冷静に反省し、考え直してみることもある。ブラッヅヘイの示唆をもっとよく考えてみたいという気持にもなるらしい。たとえば、一七五一年三月の手紙――これはグランディソンの性格に触れたものであるが――では、貴女の moderate rake の説や、私の描く善人は無気力に見える、という言葉に私は少からずがっかりしている、と述べている。そして更に次のようにつづける。

Do you, Madam, find some faults, that I may make what is already done more perfect.—How should I know ladies' minds, ladies' foibles, ladies' secret thoughts? How shall a man obscurely situated, never delighting in public entertainments, nor in his youth able to frequent them, from narrowness of fortune, had he had a taste for them; one of the most attentive of men to the calls of his business; his situation for many years producing little but prospects of numerous family; a business that seldom called him abroad, where he might in the course of it see and know a little of the world, as some employments give opportunities to do; naturally shy and sheepish, and wanting more encouragement by smiles, to draw him out, than any body thought it worth their while to give him; and blest, (in this he will say blest,) with a mind that set him above a sought-for dependence, and and making an absolute reliance on Providence and his own endeavours. How, I say, shall such a man pretend to describe and

enter into characters in upper life? How shall such a one draw scenes of busy and and yet elegant trifling?[14]

つまり、低い身分から身を起し、商売一筋にはげんで来たこの私は、上流社会の婦人達のこまかい感情に通じない引っ込み思案の男なのです、とややくどい程弁解している。だが、こんな自信なげなことを云ううちに、その口調が次第にかわってくる。なるほど私は教養も大陸旅行の経験もないが、独立独行の精神で、神の助けと自分の努力でこれまでになったのです、という誇らしげな自己主張が現われる。このあたり、リチャードソンという人の気持が想像できるようである。市民的生き方への強い信頼があるが、その反面、上流社会の趣味、教養が自分に欠けているために、サー・チャールズの描き方に不十分なところがありはしないか、とする不安感がある。リチャードソンはブルジョアジーの美徳を貴族階級のそれに接木をした、即ち bourgeois aristocracy の理念を確立しようとした、と云われるが、その背後にはこのような心理が働いていたのである。先に触れたラヴレイスの口を通してのブルジョア批判もこういう見方からもっと考えてみると面白いと思う。

ブラッヅヘイは、リチャードソンの反論に答えて更にくわしく考えを説明する。私は moderate rake をすすめているのではなく、ラヴレイスの持つあのエレガンスの上に立派な心(a great and good soul)をそなえた人物を云っているのです。貴方の真面目な人達(sober men)は、教養(liberal education)にとぼしく、不快でさえある、とこう述べて、これ以上云っても無駄のようだから、この話は止めにしましょう、とまで書くのである。両方ともに自分の意味がお互に通じないのにいらだっている様が感じられる。こうして、この対立の背後に、両者のメンタリティのみならず階級感情の相違があることがほぼ明らかになったと思う。そうして、リチャードソンが、これら二つの環境、階級のどちらにも部分的に所属しているという事実が、彼の立場をいっそう複雑にし

ていると云えるであろう。彼の誇りと自信の無さはこのあたりから生れるものらしい。

右の事情をそれでは作品に即して考えるとどうなるであろうか。それは、『クラリッサ』でのかなり思いきった恋愛や性衝動の描写（ただし作者は、クラリッサの気持はラヴではなくライキングであるとあとがきで断っている）や、マッキロップが「道徳的あいまいさの世界」と説明するもの、つまり単なる教訓主義をこえたフィクションの構想などを修正し、再び教訓的意図をはっきりさせようとする態度となって現われる。教訓的立場からみると、魅力のある悪人や moderate rake というぜいたくは許されない。右の手紙の時期は、作者が『クラリッサ』の第二版、第三版でのテキストの訂正と増補、説明的註の追加などの具体的手段をとりつつあった時期にほぼ一致する。このテキスト改訂問題については、キンキード・ウィークス（M. Kinkead-Weekes）の詳細な研究[15]があるので、ここでは立入らぬことにするが、要するに「魅力あるラヴレイス」のイメージを打ち消して、悪の代表たるラヴレイス、美徳の女性クラリッサをはっきりさせることを主とし、作品全体の教訓的意味を明瞭にするのがその目的であった。そしてやがて、もう誤解をうける余地のない、あらゆる点で模範的な男性サー・チャールズが文字通りさっそうと第三の作品『サー・チャールズ・グランディソン』で登場する。彼は十八世紀ブルジョア・アリストクラシーの理想像として興味ある人物ではあるけれども、小説の歴史から見ると『クラリッサ』から一歩後退した作品と云わねばならない。[16]

死を描く文学として

こうして結局クラリッサはラヴレイスの手を拒否して死んでゆく。ゆるやかに近づく彼女の死の描写は、この作品の大きな特色の一つに数えられる。今日から見ると、この部分は冗長で、無理やりに読者の涙をしぼりとろ

うとする俗悪なところとされることもある。しかし、この種の死の描写は、シュッキング（L. L. Schücking）やワットによれば、[17] ピューリタニズムに特有の「死の文学」とも称すべき十七世紀はじめから存在した形式につながるものである。これらの作品は、死の前後や、葬式の様などを描写し、人の命のはかなさを教える教訓書である。そこで死をめぐるゆううつ感、悲しみの情緒もまた描かれる。バニヤンの（John Bunyan）の *The Life and Death of Mr. Badman* の終り近く、バッドマン氏の妻の死の描写などもこの系統に属するものである。こうして十八世紀には、リチャードソンの友人のヤング（E. Young）や、グレイ（T. Gray）の作品にも影を投げかける。それはさておき、ワットは、クラリッサの死をめぐる部分は不自然にうつろうとも、当時の文学的環境を忠実に反映するものと解すべきである、と説明している。死を前にして毎日その用意をし、棺も註文して自室に置く、というクラリッサの行動はたしかに異常にうつる。こういう印象をうけるのは今日の私達ばかりでなく、当時の人々の中にもあったようであるが、それは、この形式の作品がピューリタンを主な読者に持っていたことにも関係があるのかもしれない。リチャードソンの読者の一人チャニング（J. Channing）は、一七四八年十月の手紙で書いている。

> Your reader will be shocked, forsooth, at poor Belton's horrid end—be it so; perhaps too at Clarissa's coffin, and her familiarity with an object naturally undesirable; and yet I can assure you, my dear friend, some scenes I have myself been present at, very much resembling those you represent, the momory of which I could wish never to lose. And give me leave to say, the reader who would be most shocked by them, has perhaps the most need of them.[18]

この手紙の筆者も、死の描写を文学的というより、教訓的なものとして理解しているが、これよりさきリチャードソンも、すでに一部引用した『クラリッサ』の悲劇的結末を弁明する手紙で、弁明の根拠の一つとして死を描く文学の意義を述べる。

> But why, as I asked in my former, is death painted in such shocking lights, when it is the common lot? If it is become so terrible to human nature, it is time to familiarize it to us.[19]

リチャードソンのこういう関心は、のち、ヤングの *Conjectures on Original Composition* (1759) の執筆の際にも見られる。ヤングに意見を求められた時、リチャードソンはアディソン (Joseph Addison) のキリスト教徒にふさわしい死の場面を加えることを強くすすめ、ヤングはそのため相当の無理をしなければならなかった。[20] *Conjectures* にはリチャードソンの考えがかなり強く反映されているが、たとえばその中の "His〔Addison's〕compositions are but a noble preface; the grand work is his death: ..." など、リチャードソンの主張を示すものであろう。

死の文学の伝統はバニヤンの *Grace Abounding* の次のような文章にも感じられる。

> ... and as touching this world, to *count the grave my house, to make my bed in darkness, and to say to Corruption, Thou art my Father, and to the Worm, Thou art My Mother and Sister*: that is, to familiarize these things to me.[21]

このいくらか異常な感覚は、クラリッサの棺の話に通ずるところがある。彼女も註文した棺（coffin）を house と呼び、それが「よろこびと勇気」（pleasure and spirits）を与えてくれる、と云う。ベルフォードはその時のことを次のように伝えている。

She would not ask *me*, she said; but would be glad, since it (the coffin) had thus earlier than she had intended been brought in, that her two good friends would walk in and look upon it. They would be less shocked when it was made more familiar to their eye: don't you lead back, said she, a starting steed to the object he is apt to start at, in order to familiarize him to it, and cure his starting?[22]

これまでのいくつかの引用で familiarize とか familiar という語が用いられているのに注目すべきであろう。

ここで *Grace Abounding* を引用したのは、ピューリタン文学の伝統の今一つの大切な形式である Spiritual Autobiography と、リチャードソンの文学とのつながりについて、一つの展望を試みようと考えたからでもある。最後にこの点を考えてみたい。

Spiritual Autobiography

自己の魂の状態をすみずみまで検討し、せんさくし、常にその有様を把握し、様々の情念を統制すること、つまり self-control は、ピューリタニズム、市民階級の特性の一つといわれるが、これを実現する方法の一つとし

て彼等の間に日記や反省記（自伝）などの習慣があった。ダニエロウスキ（E. Danielowski）という研究者はこの点に注目し、クエイカー教徒の間で行われた日記、自伝との関連においてリチャードソンの小説を考察しているようである。しかし、クエイカー教徒と限定しないでもっと広くピューリタンの自伝 —spiritual autobiography— を中心とする自己反省の文学、という点から考えてみてもよいのではないかと思われる。オックスフォード版 *Grace Abounding* の編者シャロック（R. Sharrock）は、この種の自伝形式を "a recognizable seventeeth-century genre" であると云っている。[23] 罪の自覚にはじまり、自らの無力を悟ることによって信仰に入り、様々の誘惑、迷いとたたかい、選ばれたものとして恩寵にあずかるまでの道程、そこにおいて自己の魂と行動のあらゆる些細な点までくわしく分析し、記述する習慣がピューリタンの間に革命以前から存在していた。[24] それは口頭により、または原稿の形でせまい範囲に限って知られていたのであるが、やがて出版されるようになり、十七世紀後半にははっきりした形式をとって、バニヤンの *Grace Abounding* のような文学にまで成長するのである。また日記などは、筆者の死後、知人の回想などを補足し、故人の信仰生活を語る教訓資料として用いられたり、編集されて伝記形式をとることもある。あるいは、故人の葬儀の際の追悼説教（funeral sermon）で、説教者はこれらの資料を用いて短い伝記を語ることが多かったが、これらもやがて出版されるようになる。こうして内省の記録としての日記、自伝、伝記という形式の作品が成立する。ハラー（W. Haller）は、これらの形式がやがてピューリタンの読者層をこえて、独立の文学作品に成長していった、と云う。特に興味あることは、リチャードソンが印刷業から文学へと入った際、その媒介となったピューリタンの日常教訓書が、これらの自伝、伝記などに付随して、いわばこれらのすぐれた信仰実践者の生き方に従う時の実践面を教えるものとして存在していた、ということである。前節で述べた死の場面の描写も、こういう伝記作品の末尾をかざるものとしてあっ

たとも考えられる。リチャードソンのみならず、初期のイギリス小説の歴史を、この種の内省文学の展開として見ることは、シュッキングやシェフラー(H. Schöffer)[25]などのドイツの学者がすでに試みている。ホーンビーク(K. Hornbeak)の *Familiar Letters* の研究は、[26]これらの学者の研究をふまえたものである。初期のイギリス小説を知るためには、シュッキングやシェフラーの見方は特に注目すべきだと思う。シェフラーは、その著 *Protestantismus und Literatur* において、バニヤン、デフォー、リチャードソンなどの散文市民文学を、すでに述べたような十七世紀の宗教、教訓文学が次第に世俗化し、物語的(erzählend-historisch)な要素を深めてゆく過程として概観する。シェフラーは小説についてはおよその展望を与えるに止まり、こまかい点にはあまり触れていない。シェフラーやシュッキングの十八世紀文学の見方については別の機会に考えてみたいと思うが、今は右のような点を念頭において、広義の自伝文学、spiritual autobiography としての『クラリッサ』を眺めてみることにする。

先ず、クラリッサの友人ミス・ハウの立場をとってみると、彼女はクラリッサの confidante として物語の進行を助け、クラリッサの気持や行動にコメントし、また性格の対照によって喜劇的効果をも提供する、という大切な役割を担うのであるが、その上にもう一つ、クラリッサの生涯を記録し、世間の人達にそれを伝える、つまり先に言及した説教者の仕事も果している。彼女は、クラリッサの親友として、クラリッサの死後、その人柄や日常生活を語り、彼女の真の姿を伝えて人々の教訓にしようとする。この案はまだクラリッサが生きているうちに、ハウの母親が考えていたことで、クラリッサが経験した多くの苦しみと不幸の中での気高い言行の記録は、世の人々への模範と警告となり役立つだろうと云って、クラリッサにその悲しい物語、即ち自伝を書くことをすすめる。[27]一方クラリッサはすでに自分の経験を綴りはじめているが、それをハウの手にまかせたいと希望し、べ

ルフォードのもとにある筈のラヴレイスの手紙を入手し、それにハウが所有しているクラリッサ自身の手紙などの資料をあわせるなら、私の事件全体を正しく知ることが出来るでしょう、と語る。[28] このように、周囲の人々も彼女自身も伝記もしくは自伝を書くことを意識している。ベルフォードは、彼女の手記を読めば“melancholy pleasure”をきっと感じるだろうと云うが、『クラリッサ』全体のムードをこの言葉がうまく云い表わしているように思われる。しかも、手記を書く彼女の様を述べるベルフォードの次の言葉は、『クラリッサ』の創作の方法を説明し、弁明することにもなる。この言葉は『クラリッサ』三版の序文にリチャードソンによって引用されている。

> Such a sweetness of temper, so much patience and resignation, as she seems to be mistress of; yet writing of and in the midst of *present* distresses! How *much more* lively and affecting, for that reason, must her style be, her mind tortured by the pangs of uncertainty (the events then hidden in the womb of fate), *than* the dry narrative, unanimated style of a person relating difficulties and dangers surmounted; the relater perfectly at ease; and if himself unmoved by his own story, not likely greatly to affect the reader.[29]

こうして、広義の spiritual autobiography は、『クラリッサ』全体の底流として存在し、そのムードをつくり、作品の存在理由、方法の一部を説明している。事実、形式的に云っても、『クラリッサ』は、日記、自伝、伝記の三要素すべてを含んでいる。

先に、ハウがクラリッサの死後、生前の彼女の日常生活を語る部分について書いたが、これをもうすこしくわしく読んでゆくと興味ある問題が出てくる。この部分は、キンキード・ウイークスの論文によると、三版において特に増補、拡大された所であって、教訓的意図を強調するものである。かつてのクラリッサの美徳を語るいわば funeral sermon に当り、十七世紀以来の教訓文学とのつながりを鮮明にしようとする改訂である。数々の美点を数え上げるこのあたりは『クラリッサ』のもっとも面白くない個所の一つとされるが、これも、死を描く部分と同じく、宗教的教訓物のコンヴェンションの一つと解することができるのではないだろうか。さて、その記述によれば[29]、クラリッサの日常生活の一日二十四時間は、きっちりいくつかの仕事に割当てられている。睡眠六時間、午前中の三時間を書斎で過し、手紙を書いたりする。二時間を家事に、五時間を針仕事、画、音楽、牧師との対話などにあてる。朝食、ディナに二時間、これには一時間の余裕が与えられる。一時間を慈善のため、残り四時間を夕食その他に使う。この最後の四時間を彼女は“fund”と称し、他の割当て部門で足りない時間(debits)をこの資金でまかなう。ある部門で時間超過となった場合、他から借りる(borrow)こともある。これらの時間の取引きを彼女は会計簿(account-book)に記入し、一週間毎に決算をして貸借なし(even)となればそれでよいが、もし借りが残ると次週にくりこして決済する。このように時間の配分を会計簿を用いて運営するのは、私達にはあまり形式的できゅうくつに見えるのだが、単に時間に限らず、一切の行動や感情を、毎日、「魂の貸借勘定」(Spiritual accounts)として記録することは、Spiritual Autobiography 系統の作品ではしばしば見られることなのである。ホーラーはその例をいくつかあげているが、ある人は、毎晩、その日の行動の善悪を反省し、“what income and spirit he received in his spiritual traffique”[31]をくわしく記録するのを常としたといわれる。このようにして、魂を検討し、そのおかした罪や善の大小を比較する(これも一種の会計であ

る）というはたらきは、*Grace Abounding* にも見られる。一三九節以下の記述などその一例と云える。誘惑に負け、一時的にせよ神を捨てた自分は果して救われるのだろうか、とバニヤンは悩む。自分のおかした罪の重さと、他の人達のそれとをはかりにかけて比較し、自分と同じ重さの罪をおかしながら、しかも神の赦しを得た人はないだろうか、もしそんな人があれば自分も救われるだろう、と僅かに希望を持つ。ダビデ、ペテロ、ソロモンなどの罪とひとつひとつ比べるが、そのどれよりも自分の罪は重い。だが、彼等の罪全体の合計と、自分ひとりのそれとを比べてみたらどうなるだろうか、と彼は思う。

> …; then I began to think thus with myself: Set case I should put all theirs together, and mine alone against them, might I not then finde some encouragement? or if mine, though bigger than any one, yet should but be equal to all, then there is hopes: for that Blood that hath vertue enough to wash away all theirs, hath also vertue enough to do away mine, though this one be full as big, if no bigger, then all theirs. Here again, I should consider the sin of *David*, of *Solomon*, of *Manasseh*, of *Peter*, and the rest of the great offenders, and should also labour what I might, with fairness, to aggravate and heighten their sins by several circumstances: but, alas! 'twas all in vain.[32]

以上はごく大まかな要約であって、個々の罪ばかりでなく、その罪をおかした時の付帯的条件（circumstances）もくわしく計量される。罪と救いとを並置して一つ一つ比較してゆく時、book-keeping の比喩は直接に出ていないが、それに近い感じはたしかにある。バニヤンの場合、二つのものを「天びん」（scales）にかけるという比喩がよく用いられる。罪のどんなかすかな重みにも敏感に反応する天びんが、自己反省のあり方のシンボルとな

っている。一例をあげると、

> But so soon as that powerful operation of it was taken off my heart, that other about *Esau* returned upon me as before; so my soul did hang as in a pair of Scales again, sometimes down, now in peace, and anon again in terror.[33]

この考え方はピューリタン、更には市民文学の内省のパターンと見てもよいのではなかろうか。たとえば『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*) にもそれは見られる。クルーソーは無人島に流れついてのち、自分の置かれた状態や運命のプラス (good) とマイナス (evil) とを一つ一つ数えて対置して記してみる。ただしその内容は罪と救いというような宗教的なものではなく、どれも実際的なものばかりと云ってよい。無人島にただひとり着るものもなく取残されてしまった、というマイナスに対して、仲間は皆死んでしまったのに好運にもひとり命を全うし、丁度暑い所なので衣類はほとんどなくても暮せる、というプラスがある、など。これらの事項をあげて、差引きすれば "the credit side of the accompt" に若干残る、とクルーソーは結論する。[34]『パミラ』ではどうか。若主人のB氏は、パミラを自分のもの (a vile kept mistress) にしようとして、財産贈与、贈物などの好条件を七つ出し、よく考えて (well weigh the matter)、自分の云うことを聞くがよいと申出るが、パミラはその各条件一つ一つについて反論し、結局B氏の提案を拒否する。[35]『クラリッサ』の場合については、すでに述べたが、もう一つ例を引用しておく。彼女はラヴレイスに対する自分の気持をはっきりつかもうとして、その相手を分析する。最初に "At first, *what occurred to me in his favour*" として彼の美点を一つ一つ述べ

る。そして最後に、

And let me add, that the favour of his relations (all but himself unexceptionable) has made a good deal of additional weight, thrown into the same scale.

次に、*But now, in his disfavour* として彼の欠点をあげる。この双方を比較すると、欠点の方に超過（*over-balances*）がある。

Why then, my dear, if you will have it, I think, that, with all his preponderating faults, I like him better than I ever thought I should like him; and, those faults considered, better perhaps than I *ought* to like him. And I believe it is possible for the persecution I labour under, to induce me to like him still more—especially while I can recollect to his advantage our last interview, and as every day produces stronger instances of *tyranny*, I will call it, on the other side.[39]

この引用からもわかるように、日毎に新しい要素の出入りがあって、彼女はそれを調整してゆかねばならない。こうして、欠点の方が重い（preponderate）にもかかわらず、彼女は彼にひかれ、彼とロンドンへ向う。こうして魂の帳簿の指示にもかかわらず、それに反して行動したことが、即ち misconduct であったのである。

この節で述べたような「魂の貸借勘定」というパターンは、私達が日常生活で物事を判断してゆくとき、大なり小なり実行しているものであって、特にこの時代の市民文学と関連して考えなくてもよいのかもしれない。し

かし、注目すべき現象であると思う。ライバル作家のフィールディングが、『トム・ジョウンズ』(*Tom Jones*)の第六巻十三章で、似通ったシチュエイションを彼独特のユーモアをもって描いているので、終りに引用したいと思う。彼等の方法上の対照がよく出ていて面白い。フィールディングは、これを"the Discussion of a Knotty Point in the Court of Conscience"と云っている。

Black George having received the purse, set forward towards the alehouse; but in the way a thought occurred to him, whether he should not detain this money likewise. His conscience, however, immediately started at this suggestion, and began to upbraid him with ingratitude to his benefactor. To this his avarice answered, That his conscience should have considered the matter before, when he deprived poor Jones of his £500. That having quietly acquiesced in what was of so much greater importance, it was absurd, if not downright hypocrisy, to affect any qualms at this trifle. In return to which, Conscience, like a good lawyer, attempted to distinguish between an absolute breach of trust, as here, where the goods were delivered, and a bare concealment of what was found, as in the former case. Avarice presently treated this with ridicule, called it a distinction without a difference, and absolutely insisted that when once all pretensions of honour and virtue were given up in any one instance, that there was no precedent for resorting to them upon a second occasion. In short, poor Conscience had certainly been defeated in the argument, had not Fear stepped in to her assistance, and very strenuously urged that the real distinction between the two actions did not lie in the different degrees of honour, but of safety; for that the secreting the £550 was a matter of very little hazard; whereas the detaining the sixteen guineas was liable to the utmost danger of discovery.

By this friendly aid of Fear, Conscience obtained a complete victory in the mind of Black George, and, after

making him a few compliments on his honesty, forced him to deliver the money to Jones.

以上、『クラリッサ』を中心に、教訓文学をめぐる二、三の問題点を考えてみた。当然参照すべき作品や研究も多く残っているし、考察も不十分であるが、今後もこれらの問題点を更に考えてゆきたいと思う。

（一九六四・七・三十一）

〔註〕

① B. Dobrée, *English Literature in the Early Eighteenth Century 1700–1740* (Oxford, 1959), p. 403.

② A. D. McKillop, *Samuel Richardson: Printer and Novelist* (The Shoe String Press, 1960), p. 127.

③ A. L. Barbauld (ed.), *The Correspondence of Samuel Richardson* (London, 1804), Vol. IV, pp. 233–234.

④ Richardson, *Clarissa Harlowe* (Everyman Edition), IV, pp. 118–119.

⑤ S. Johnson, *Lives of the English Poets* (Everyman Edition), I. p. 320.

⑥ Richard Cumberland, *The Observer*, No. 78 (1785). See Scott Elledge (ed.), *Eighteenth-Century Critical Essays* (Ithaca, 1961) II, p. 955.

⑦ James Beattie, 'On Fable and Romance' in *Dissertation Moral and Critical* (London, 1783). See Scott Elledge, *op., cit.*, II, p. 927.

⑧ H. C. Ward, 'Richardson's Character of Lovelace', *MLR*, VII (1912), pp. 494–497.

⑨ A. L. Barbauld, *op., cit.*, Vol. IV, pp. 189–190.

⑩ F. Enomoto, 'Clarissa Harlowe's Pursuit of Happiness', *Studies in English Literature*, XL 2 (Tokyo, March 1964), p. 182.

(11) Ian Watt, *The Rise of the Novel* (London, 1957). Morris Golden, *Richardson's Characters* (Ann Arbor, 1963).

(12) A. L. Barbaud, *op., cit.*, Vol. VI, pp. 43–44.

(13) *Ibid.*, Vol. VI, p. 64.

(14) *Ibid.*, Vol. VI, pp. 86–87.

(15) M. Kinkead-Weekes, '*Clarissa* Restored?', *RES*, X (1959), pp. 156–171.

(16) 内多毅「イギリス小説の社会的成立」（東京、研究社、昭和三十五年）一八二頁—一八四頁。

(17) L. L. Schücking, *Die Puritanische Familie in Literar-Soziologischer Sicht* (Bern, 1964), pp. 145–146. Ian Watt, *op., cit.*, pp. 216–218.

(18) A. L. Barbauld, *op., cit.*, Vol. II, pp. 334–335.

(19) *Ibid.*, Vol. 4, p. 192.

(20) A. D. McKillop, 'Richardson, Young, and the *Conjectures*', *MP*, XXII (1925), pp. 391–404.

(21) John Bunyan, *Grace Abounding* (Oxford, 1962), § 326.

(22) Richardson, *Clarissa*, IV, p. 256.

(23) John Bunyan, *op., cit.*, Introduction, xxvii.

(24) 以下の記述は William Haller, *The Rise of Puritanism* (New York, 1957), chap. 3 に負うところが多い。

(25) Herbert Schöffler, *Protestantismus und Literatur* (Göttingen, 1922. Reprint 1958).

(26) K. Hornbeak, Richardson's *Familiar Letters* and the Domestic Conduct Books (Smith College Studies in Modern Language, Vol. 19, ii. 1938).

(27) Richardson, *Clarissa*, IV, p. 46.

(53) *Ibid.*, IV, pp. 61–62.

(54) *Ibid.*, IV, p. 81.

(55) *Ibid.*, IV, pp. 506–509.

(56) William Haller, *op.*, *cit.*, p. 100.

(57) John Bunyan, *op.*, *cit.*, § 169.

(58) *Ibid.*, § 207.

(59) Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (Everyman Edition), p. 50.

(60) Richardson, *Pamela* (Everyman Edition), I, pp. 164–69.

(61) Richardson, *Clarissa*, I, p. 203.